

追憶

山下 太郎

話は大分昔に遡る。私の中学生の頃一人の可愛い女の子が吾が家の一員に加つた。ポツチャリした色白で六才位、目を細くして笑う朗な子で誰からも愛された。母が殊更に其子を可愛がり外出にもよく連れて歩いて居た。私達と同様自室を持ち食事も毎日家族と一緒にだつた。

夏休みには私がその頃あつた逗子の父の小さい別荘で泳いで暮すのにその子も来て居た。真黒に日に焼けた中学生の私が可愛いお河童頭の七・八才の女の子を連れて歩いて居た姿を覚えて居る方もあると思う。

其の女の子、名を餅繁子と云う。明治卅六年冬門司に入港せんとして六連沖で暴風雨の為沈没、船と運命を共にした山下の二隻目の持船第二喜佐方丸船長餅勇太郎氏の遺児である。

餅船長の最後は悲壮であつた。乗組員は一人も助からなかつた。嵐が静まり、沈船よりはマストに身を縛した船長の遺骸が発見された。対岸長州に漂着した乗組員の死骸は皆救命具をつけ鰐節を携帯して居た。船を救うべく最後の努力をしたが終に力及ばぬ事を知つた船長は乗組員を万一を頼んで陸に向はせ、自己は沈没の全責任を負うて船と運命を共にしたのであつた。其葬儀には父は見つとも無い位泣いて居た。

繁子チャンがかくして私達の家で美しく育つたのは船主山下一家の同船長に対する感謝の印であつた。長じて双葉女学校に通ふ様になると、又お友達からも先生からも愛された。同級に三井家のお嬢さんが居たが、よく先方へも招かれ私の家へも遊びに来られたが、其の方と遊んで

居ても別に恥かしく無い服装態度であつた。

其の後良縁を得て三井物産の社員小寺五郎氏と結婚、永くドイツで生活、立派な奥さんになつて居る。(現在小寺氏は三井系日本高圧容器株式會社社長)

第一時大戦の時代は私はまだ学生であつたので、あまり多くの事を記憶して居ないが、第二時大戦中は社長であつたので思い出も数へ切れぬ程多いのである。同大戦中に約八十四隻四十万総屯の船と千七百余名の乗組員諸君を失つたのであるが、横浜から或いは神戸から御用船として出帆する船を出来るだけ見送り、武運長久を祈つたのである。見送る者も見送らるる諸君も口には云はぬが「これが別れになるかも知れぬ」との思いは致し方無かつた。

中でも最も強く記憶に残つて居るのは御用船高津丸出発の情景である。此船は実に奇妙な成りゆきの船であつた。山下汽船の船でありながら山下の重役も工務もどんな船が出来上がるのか何も分らなかつた。誰も見る事を許されないのである。やがて完成して高津丸と命名され、山下の船員が配乗された。彼等も又船の構造等に関し軍の機密として何も語る事は許されなかつたのである。

いよいよ高津丸は、装備を完了して出発の日が近付いた。其時、軍から「社長一人だけ乗船を許すから来ても良い」と通達があつた。吾社の乗組員に会つて名残りを惜しめる事を喜んで一人ランチで出かけた。見て驚いた。これは正しく軍艦である。夥しい大砲が装備されて居る。然も指揮するのは陸軍の将校なのである。多数の陸の将兵が乗組んで居り、吾社乗組員は唯運航を担当して居るのである。船では私を相当の儀礼を持つて迎へて下すつた。吾社出身の士官達は殊に喜んで私の周囲に集まつてくれた。「社長は素人だから船内を見せて上げてよらしい」指

揮官の言葉で一人の若い大尉位の将校が船内を案内して見せて貰った。カンガルーが腹の中に子供を多数入れて居る様に此船の胴腹の中には上陸用舟艇がビツシリ入つて居り、後部の扉を開けば兵を満載してスクリユーを廻しつゝ飛出せる様になつて居た。敵前上陸用舟艇の母艦であつた。船名の高津とは神武天皇御東征の折、近畿地方御上陸の時の地名の由である。案内を終つて若い大尉は、「私は此舟艇群を卒いて敵前上陸を指揮します」、それからニツコリして「私は社長と御関係の深い住友海上の社員であります」。私は当時住友海上の重役を兼務して居た。矢張他人の様な気はしない。

時は過ぎ、名残りは尽きないが、私の帰るべき時が来た。私の下船を見送る為、整列してくれた吾社乗組員の前に私は立つた。彼等はジツト私の目を見て居る。私も彼等一人一人の目を見る。

若い人達である。選りすぐつたと見えて容姿も態度も本物の軍人に少しも劣らない優秀な人ばかりである。

「武運長久を祈るよ、無事で帰つてくれよ」私は目でそう云つたつもりである。

船長は「では行つて参ります。山下汽船の名誉にかけて、日本海員としての義務を立派に果して参ります。社運の隆盛と皆様の御健康を祈ります。私達が万一帰れぬ場合、後をよろしく願ひします。皆さんによろしく伝えて下さい」と凛々しく挨拶をした。

涙もろい私の目は少し怪しくなつて来た。陸軍将兵の前でもあり、戦の門出である。不景気な顔付は禁物である。急いでランチに乗り手を振り合つて別れた。

一人帰る私の気持は暗かつた。昭和十九年初秋の頃で敗戦の色は濃かつた。この優秀な若い人達を、あの熾烈化した南方海上の戦へ！ 私は

悲しく腹立たしかつた。

船は十九年の暮、レイテの戦にオルモック湾に突入して勇戦の後撃沈された。吾社の乗組員は一人も帰らなかつた。あの若い将校達も恐らく同じ運命であつたらう！

あの乗組員諸君が今生き永らえて居れば、遠洋航路の優秀船の船長、機関長として第一線に活躍して居る人達であらう。又住友出の若い舟艇隊長も同様に同社の幹部級で働いて居られよう。惜しい、何としても惜しい。何百度云つてもまだ足りない程惜しい、残念な事である。

この様に思い出は限り無く多いけれど、紙面も尽きて来たので此二つの話だけで筆を止める。其の他の犠牲者の全部も海員としての義務を立派に果して祖国に殉じた人々なのである。又二度も三度も撃沈されながら泳いで生残り、今尚第一線で活躍して居る人も多い。

筆を擱くに当り謹みて千八百四拾三柱の霊に頭を垂れて其御冥福を祈るものである。

昭和三十五年春

(昭和三十五年発行「殉職者追悼録」より転載)